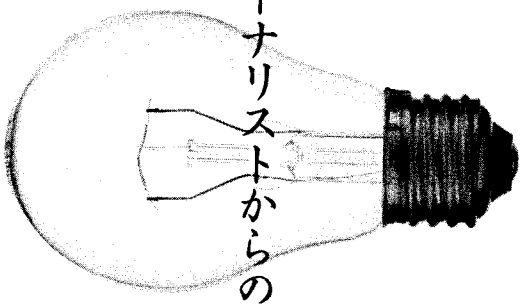

ジャーナリストからの直言

キューバ医療が問いかけること

毎日新聞大阪本社 論説委員

池田　知隆

「テロより怖い、医療問題」――今夏に公開されたマイケル・ムーア監督の映画「シッコ」のキャッチコピーだ。米国の医療が民間医療保険会社によって破壊されている姿を皮肉たっぷりに描いている。構造改革による格差社会化が叫ばれる日本の医療の未来についても大いに考えさせられた。

映画の冒頭、作業中に指２本を切り落とした大工職が「あなたの保険では１つの指しかくっつけられない。数百万円出せば２本目もつける」と手術前に言われ、１本だけにしたというインタビューがあり、驚かされた。

アメリカの健康保険充実度は世界37位で、先進国では最低。公的医療保険制度はなく、国民は民間医療保険に加入している。当然ながら保険料の安い保険は、医療費が高い病気には適用されない。保険会社は、「治療は不必要」と診断して支出を減らした医者には奨励金を与え、加入者には何かと理由をつけて保険金を支払おうとはしない。

先日、大統領選挙に向けて有力候補、ヒラリー・クリントン上院議員は公的国民健康保険の創設を提唱した。しかし、ヒラリー議員は以前にも同じように提唱したが、保険会社からの多くの献金で結局、黙ってしまった。今回は撤回しないと信用していいのだろうか。

米国の乳児死亡率はキューバ以下

「医療保障？キューバに頼んでくれ」と題したニューヨーク・タイムズの記事（2005年１月12日）が手元にある。そこには「悲しい事実を